

チュー政権末期のメコンデルタ農村部  
におけるリーダーシップ

坪内良博\*・前田成文\*

**A Report on the Rural Leadership in Delta Region  
under Thieu Government**

by

Yoshihiro TSUBOUCHI and Narifumi MAEDA

This report aims at presenting the characteristics of rural leaders, especially those of hamlet chiefs, in the Mekong Delta region of Vietnam in the last days of the Thieu Government, based on a field survey from December 1974 to January 1975.

In the Delta region hamlets are larger in size, and houses are more scattered, than in North or Central Vietnam. This fact makes the function of village leaders somewhat weak and limited. In spite of this overall similarity, regional differences in leadership are clearly marked, reflecting the physiographical, historical, and religious background of each area. Major types are associated with traditional Vietnamese dominant areas, Khmer dominant areas, and areas where a specific religion is dominant, respectively.

Apart from the variation mentioned above, the war-time situation was found to be seriously affecting the character of formal leadership. Younger people in their twenties or thirties tended to be hamlet chief rather than village elders, and they had little support from their own generation owing to the peculiar age structure of each village, which lacks this generation as a result of the heavy draft. In less secure areas hamlet chiefs were usually appointed from among ex-soldiers etc. from outside, as few residents were willing to take this responsibility. In some places, these chiefs could barely perform their governmental assignments.

はじめに

いわゆる開発の遅れている国における農業発展は農民自らの力でなしとげられる面とならんで、政府からの働きかけが大きな役割を果たすことが多く、またそれが期待されている。このような働きかけを末端においてうけとめ実行にうつすには、農業技術者のみでなく行政関係者の担う役割も大きく、農村部のリーダーシップの性格を知るとは非常に重要と言える。本報告は南ベトナムのメコンデルタ地域に位置する農村において、チュー政権末期における農村の

\* 京都大学東南アジア研究センター

リーダー達が如何なる性格を有していたかを明らかにしようとするものであって、1974年12月中旬から75年1月中旬にかけて、デルタ各地で面接調査によって集められたデータを基礎にしている。<sup>1)</sup> 面接したサンプルは戦略活動が行なわれて危険な所を除いてデルタ全域に及んでい

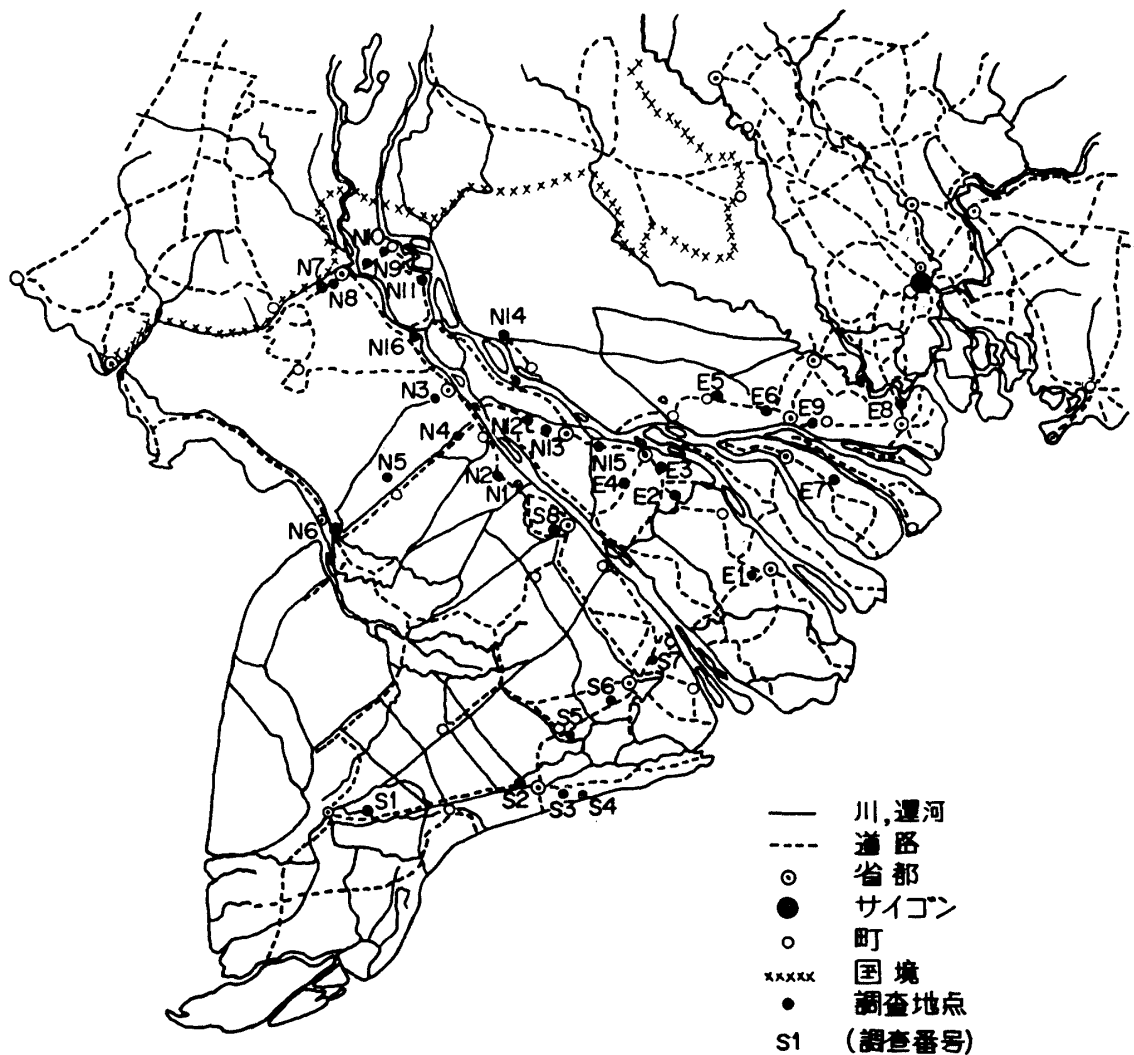


図1 調査村落の分布概略図

1) 調査に際しては、我々と行動を共にされた土壌学の久馬一剛教授には公私共にお世話になった。また調査地の選定にあたっては、先発チームの高谷好一、海田能宏、福井捷朗各氏からの御教示に負うところ大であった。我々調査隊の受け入れの窓口となっていた、ベトナム国内メコン委員会の事務総長 Lê Cảnh Túc 氏、Cần Thơ 大学農経学科長 Nguyễn Tri Khiem 氏および他の人々に対しては深甚の感謝の意を表したい。我々に実際に同行して村々を案内したり、通訳してくれた農務監督庁の Mai Anh Kiệt 氏、Đặng Vĩnh Quảng 氏、Cần Thơ 大学社会科学科長 Pham Hứn Thiện 教授、農経科の Trần Minh Tâm 氏、Lê Công Cán 氏に対しては、終始変わらぬ協力と友情を感謝したい。カントー大学教授の太田泰雄博士、日本文化センターの白石昌也夫妻、大使館の渡辺参事官にはいろいろアドバイスを頂いたことをお礼申し上げたい。調査費の一部は文部省海外科学研究費による。調査準備・整理の段階では筆者の一人（前田）が1974年度に受けた松永科学振興財団からの研究助成金の一部を活用させていただいた。なお、本報告に用いた時制は歴史的現在として理解されたい。

るが、解放戦線の支配していた地域は含まれていない。調査時点においてデルタ各地で解放戦線の動きが活発になってきたため、しばらく前の時点に比較してより多くの地域で調査が不可能であった。インタビューは行政組織の最末端である部落（邑）長（Trưởng Ấp）に主眼をおきつつ、社長その他の行政的リーダー、およびベトナム仏教、ホアハオ（Hòa Hảo）教、カオダイ（Cao Đài）教、カトリック、プロテスタントなどを含む宗教的リーダーなどを対象として行なった。面接したサンプルの数は、部落長22名、その他の行政的リーダー12名、宗教的リーダー17名、その他（小学校長、漢方医、一般農民）6名、計59名である（図1参照）。

## I 農村リーダーシップにおける地域的変異

村の治安状態の如何は農村のリーダーシップのあり方に大きな影響を与えていたが、この点については後に論ずることにして、ここではまずデルタにおける民族・宗教分布が行政的リーダーの性格に如何なる影響を与えうるかを概観することにする。

### (1) ベトナム的要素

元来デルタ部はベトナム人にとっては新開地である。ベトナム人によるデルタの居住は17世紀に始まり、完全にデルタをベトナムの支配下に置くのは18世紀末のことにすぎない。そのベトナム化は北東から南西へと進行して行った。北部・中部ベトナムでつちかわれたベトナム人的特性は、この意味で、デルタ北東ほど強く、バサック河を渡ってデルタ南西へむかうほど弱くなる。

### (2) クメール的要素

バサック河口部、および、バサック河右岸から少し離れてカンボジア領へと続く地帯にはクメール人の勢力が強い地域が存在する。この地域においては上座部仏教の寺院がそびえ立ち、黄衣をまとった出家僧達がいたるところにみられてクメール人達の伝統的文化の強さが感じられるが、デルタ人口の10%を占める彼らはベトナム人支配の下ではマイノリティであることに留意する必要がある。この地域にはしばしば中国人が入り込みクメール人との通婚を行っており、またベトナム人もかなり入り込んでいる場合がある。純粋なクメール地域では行政的リーダーはクメール人であることが多いが、ベトナム人の比率がある程度以上になるとこれらの職は主としてベトナム人の手に渡っている。社（わが国の行政村に相当する）のレベルにおいてはこの傾向がとくに著しい。

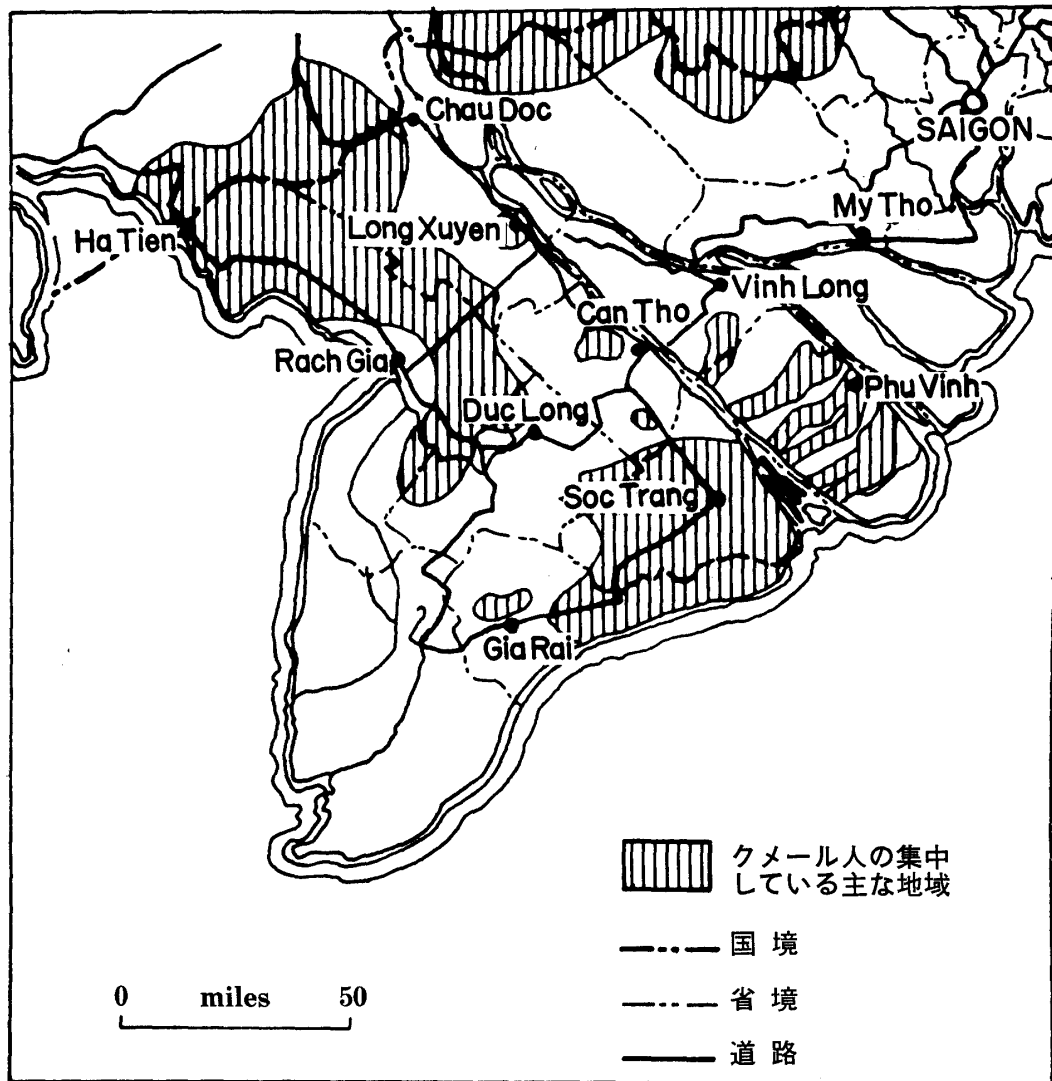
### (3) 宗教的要素

ホアハオ教はデルタで生まれ育った宗教であるが、An Giang 省、Châu Đốc 省を中心とするこの宗教の信奉者の多い地域は、ベトナム人地域の中でとくに特色のある存在形態を示す。類似の特性はカトリックやカオダイの強い地域においてもみられるのであるが、地域的な広が

りにおいては、100万以上の信徒<sup>2)</sup>を有するホアハオが最も重要である。

## II 集落形態と農村リーダーシップ

メコンデルタの集落は、河川の自然堤防の上、運河沿いあるいは道路沿いにリボン状に分布することが多い。このほかに少数例として、比較的土が高く水がつきにくい地域（たとえばGo Công 省の一部）に散村的形態がみられたり、海岸に比較的近い古い浜堤の上で集村的な形態がみられたりする。後者はしばしばクメール人の居住地域となっている。



出所：Department of the Army, U.S.A., *Minority Groups in the Republic of Vietnam*, 1966.

図2 クメール人

2) 一般にホアハオ教徒は100万，デルタ人口の15%に相当するといわれる。しかしながらホアハオ本部では信徒300万と称している。

リボン状の集落の場合、家屋の間隔はときには100mもあり、またときには軒を並べるばかりに接近している。居住地域の幅が比較的大きい大河川の自然堤防の上では家屋が二重、三重に立ちならぶこともある。密集度は立地条件、人口増加の程度に応じて様々であるが、居住の歴史が長いと思われる大河川の自然堤防上、および浜堤上などにおいて一般に密集度が高くなっている。また道路沿いの集落では町に近づくにつれて密集度が高まってくる。家屋の間隔が密であれ粗であれ、リボン状集落においては集落のきれめが必ずしも明確ではない。この点で、集落が明確な境界をもち、強い地縁的結合がその中でみられるという中部ベトナムの村落に比して、デルタの農村には不可避免的にまとまりのゆるさが現われてくる。

デルタにおいて部落長が統括する部落 (Âp) は日本の部落から想像されるような「自然村」ではない。それらは人為的にとりまとめられた地域を対象とする行政単位である。部落の人口は、われわれのサンプルの中では853ないし5,400、平均2,484であって、最も小さい部落でも132戸から形成されている。現在の部落は何らかの統合過程の結果形成されたもののようにみえる。あるレポートにはデルタの一つの社において、10個の部落が1959年に3個の部落に統合されたと記されている。<sup>3)</sup> 統合の存否は別としても、南ベトナムの他の地域に比してデルタの部落は発生当時からその範囲が広がったし、また人口増加につれて人口規模も大きくなっていったことも考えられる。<sup>4)</sup>

部落の中により自然的に形成された地縁的単位が存在するかという問題については、ある場合にはこれらが存在するし、ある場合には存在しないことがわかる。地理的条件に従って部落の下に Khóm とか Khu などとよばれる小単位が3個ないし4個形成されていることがある。Khóm や Khu が全く人為的・機械的に設定された地域単位である場合もある。これらはそれぞれの選出された長をもち、彼らが部落長からの連絡役としての機能を果たしていることが多い。他方、このような下部単位を全くもたない部落もある。いずれの場合でも、公式の行政機構の最末端は部落長である。わが国の隣組に相当するものとして、通常 Liên Gia が組織されている。これは5人組ともよぶべきもので、原則として5世帯（実際には4～7世帯）で構成される近隣組織である。伝統的な互助組織というよりは、上から組織された性格が強いが、現実にはさまざまな互助機能を果たす場合がある。

部落の上位の行政単位は社 (Xã) である。社は3個ないし10個の部落から構成され、6,000～15,000程度の人口を有している。常勤の職員および評議会（6～8人で構成）を有し、社長の下に統括されて一つの役場をもっている。中部ベトナムの伝統的村落においては、社の下単位である Làng が、村落生活において包括的な機能をその中で完結的に果たしていたといわれ

3) John D. Donoghue & Vo Hong-Phuc, *My Thuam: The Study of a Delta Village in South Vietnam*, Michigan State University Advisory Group, Saigon: 1961.

4) AID, *Local Administration in Vietnam: The Number of Local Units*, 1962.

るのに対して、デルタにおける社は大きな人口をかかえたままでしばしばそのような機能を果たす単位ともなる。日本の村落における氏神に類似したものとして紹介されるディン〔Đinh, 亭〕の祭祀役員会は中部ベトナムでは Làng を単位として組織されると言われるのに対し、デルタではしばしば社を単位として組織されることがある。興味深いことは、ディンが必ず社を単位として組織されるのではなく、社の中に数個のディンがあって、あるものは一部落によって、他のものはいくつかの部落によって維持されていることもあるという事実である。このことは、社もまた常に一つの完結体ではなく、内部にいくつかの社会的な構成単位を内包する場合があることを示している。

社が自らのディンを有する場合、その社会行政的単位としての統合性は高いと言えるが、かなり大きな人口を有し地域的な広がりも大きい社にとって、一般住民の帰属意識・一体感を強調することは困難である。むしろディンのある部落を中心として、その周辺の部落を統合するにとどまるといって過言ではない。ディンの維持組織はわが国の氏神を支える氏子組織よりはより特定の人々に集中される傾向が強く、この意味でディンはコミュニティ住民の一体性のシンボルとしてよりも、伝統的な政治・行政的統一のシンボルとして捉えたほうが現実に近いのかもしれない。

リボン状の集落においては、部落長のオフィスは部落の中心部におかれるのが理想的といえる。一部の部落長が自宅をオフィスとしているのを除けば、たいいてい部落にはオフィスとして一個の建物が与えられるので、このことは原理的には可能と言える。しかしながら、現実には部落長はたえず解放戦線にねらわれる立場にあるので、オフィスはしばしば最も安全な場所、すなわち可能な場合には公道に面した橋のたもとに設置されている。橋には必ず軍隊の屯所があって数人の兵隊が常駐しているのである。このような安全への考慮は部落長と住民との関係を若干疎遠にするという作用を含んでいる。直面する公道を持たぬ部落の場合、ときにはオフィスが部落から 3 km も離れて存在することさえあった。

### III 部落長に関する若干の特性

われわれが直接面接した22名の部落長に関するインフォメーションは表1にまとめられている。以下、部落長によるその他の情報および社長、前部落長などに対するインタビューの結果をも加えながら部落長の特性について述べることにしよう。

部落長は公務員としての性格が強く、10,200ピアストル (US\$1=700ピアストル) ないし10,700ピアストルの月給をうけとっている。現職の下士官などが任命された場合には18,000ピアストル程度支給されることもある。社長の給与が、12,000ピアストル程度の場合があることを考慮すれば、社長との隔差は極めて小さい。1961年に行なわれたデルタの一農村の調査にお

表 1 面接した部落長にかんするデータ

部 <sup>1)</sup> 落 名	年 齢	人 <sup>2)</sup> 種	宗 <sup>3)</sup> 教	他 の 職 業	農 地 ha	教 育 年 数	兵 隊 経 験 (年)	居 住 部 落	任 命 方 法 <sup>4)</sup>	在 職 年 数	助 手	部 落 人 口	民 <sup>5)</sup> 族 構 成
S 1	51	C V		商		5				2	2	1,737	V C K
S 3	50	C V		農	4.6 (元小作)	3		自		12	2	3,339	K C V
S 5	36	V		農	6 (元小作)	3	4	他	指	2	2	3,371	V C K
S 6	26	V C K	B + Co			7	3.5	自	選	4	2	3,145	K V C
S 7	36	V		農	1(耕作不能)	9		自	選	5	2	2,239	V C K
S 8	25	V	B + Co			5	6	自	指	4	1	1,358	V
N 4	43	V	H	農	0.2	5	15	他	指	3	1	1,852	V(C K)
N 5	26	V	Ca	農	3 (元小作)	11	7	自	指	0.2	1	3,150	V
N 7	36	V	H	農	3 (耕作不能)		10	他	指	3	2	2,026	V
N 8	24	V				5	6	他	指	1	2	5,400	V(K)
N12	32	V	H	仕立		5	10	他	選	3	0	1,262	V
N13	36	V	B + Co	農	2	3	4	自	指	3	2	1,929	V
N14	29	V	B	商・農	1	5		自	選	4	1	3,270	V(C)
N15	49	V	B	農	1 (小作)	5			選	14	2	1,337	V
N16	50	V	H	農	1 (小作)	5		自	指	1	2	2,775	V
E 2	38	V				3	19			3		2,275	V
E 3	44	V	B	農	1	4		自	指	0.4	0	3,700	V(C)
E 4	45	V	Cao	農	2 (元小作)	5	7	他	選	5	2	2,489	V(C)
E 6	47	V				5		他	指	0.5	2	1,440	V(C)
E 7	46	V	Cao	農	0.5	4	9	他	指	1	1	3,747	V(C)
E 8	43	V		農	3 (元小作)	5		自	選	4	1	853	V
E 9	40	V		仕立・農	1 (小作)	5		自	選	10	2	964	V(C)

- 1) すべてサンプル番号で示す。 2) V:ベトナム人, C:中国人, K:クメール人, 併記は混血を示す。  
 3) B:仏教, Co:儒教, Ca:カトリック, Cao:カオダイ, H:ホアハオ。  
 4) 選:選挙, 指:政府による指名。  
 5) V:ベトナム人, C:中国人, K:クメール人。多い順に示す。( )内は少数の存在を示す。

いて、社長の給与が1,900ピアストル、部落長が300ピアストルと報告されている<sup>5)</sup>のにくらべると、給与の差が著しく小さくなっており、部落長の機能が高く評価されると同時に、政府が部落長に課す役割負担が高まったことを示している。

人口3,000以上の部落では2人の助手、人口3,000以下では1人の助手をもち、小さい部落では助手なしで業務を行なうことが原則となっているが、<sup>6)</sup> 現実には人口2,000に満たぬ部落でも2人の助手を付けられているケースも多い。2人の助手のうち1人は行政担当、他の1人は

- 5) John D. Donoghue & Vo Hong-Phuc, 前掲レポート参照。なお1961年の物価指数(サイゴン労働者クラス, 1963年=100) 90.4, 1974年のそれは1840.8である。  
 6) オランダチームの報告参照。The Netherlands Delta Development Team, *Recommendation concerning Agricultural Development with Improved Water Control in the Mekong Delta, Working Paper VB(Social and Economic Aspect)*, Bangkok, 1974.

治安担当で、給与は9,400ピアストル～10,500ピアストル程度である。

部落長は住民の選挙によって選ばれる場合と、地方行政府から直接指名される場合とがある。いずれの場合にも省(Province)の長が任命権者であり、その役割は郡(District)の長によって代行される。治安の悪い地域では部落内から候補者が得にくく、政府からの一方的な任命が行なわれる場合が多く、他部落あるいは他社から兵士の前歴をもつ部落長が導入されるケースも少なくない。まれには部落内の橋の警備に従事していた他部落出身の兵隊が住民から選ばれて部落長に就任したというケースもある。われわれのサンプルの中では選挙によって選ばれた部落長と、政府から直接任命された部落長との割合はほぼ等しい。また、同一部落出身の者が半数余りを占め、同一社内の他部落出身の者が残りを占めている。

部落長の年齢は、直接インタビューを行なった22名については、20代5名、30代6名、40代8名、50代3名となっている。最も若い者は24歳、最高齢の者は51歳、平均39歳である。20代および30代の部落長が出現することは、農村の人口の年齢的構成からみるととくに顕著な若齢者の起用と言わねばならない。すなわち、農村部においては18～39歳男子の大部分が兵隊として動員されており、村に残っているのは主として老人と女子と子供なのである。調査地中の一つの社(サンプル番号N16)における人口の性・年齢的構成を一例として図3に示す。この人口構成はこの社においてのみみられる特殊な状況ではなく、すべての農村に共通して現われる。

(ただし統計作成に際して、兵役割当てを考慮して若干の操作が加えられている可能性は存在する。)部落長がその業務を行なうのはこのような人口に対してであって、若齢者の場合には自分と世代を異にする者に対して長としての立場にたつことになる。

若齢の部落長は必ずしも政府から直接任命されたものではなく選挙によって選ばれた者もある。治安状況を背景として部落のリーダーシップのある部分が若年者に移行していたといえ

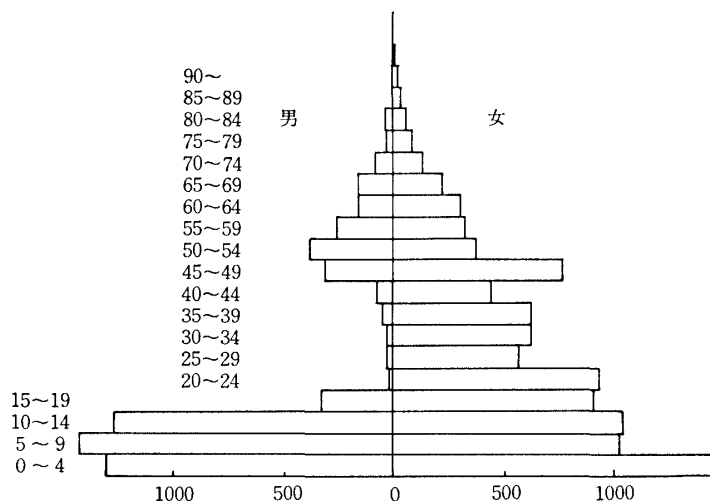


図3 社N16における人口構成

る。部落長に就任することによって軍隊勤務から解放されるということが兵役義務をもつ年齢層の部落長就任のインセンティブになっているとも言われる。サンプルの部落長のうち半数以上は兵隊の経験を有している。10,000ピアストルをわずかに上廻る給与は、これらの若齢者にとってときには魅力的であり得るが、既に農業によって一家を



構えている中・老年層にとっては、この収入の魅力は、生命の危険を背景として若年者の場合ほど大きくないことも付記しておかねばならない。

部落長の教育程度は初等学校（5年課程）卒業、または中退程度であって、必ずしも住民をリードしていくだけの十分な近代教育を身につけているとはいえない。ベトナムでは植民地時代から農村においてもある程度教育が普及していたから、若齢者の就任はこの点では従来の事態を著しく改善したとは言えない。中等教育を受けた者が部落長になっている場合は比較的まれであるが、22名のサンプルの中には2名だけ、それぞれ7年および9年の通算通学経験を有するケースがあった。社長の場合には部落長に比して中等教育を受けた者の比率が高くなり、少なくとも半数は中等学校の経験を有しているようである。

一部の若齢者を除けば、部落長の大部分は農業を営んでいる。ショッピングセンターをもつ部落では商業を営むこともある。農業に従事する場合、経営面積は地域の状況に応じて0.2 haから6 ha程度である。これらは部落の中で特に上位に位置づけられるというほどではない。サンプルのうち最も大きな経営面積を有する者は6 ha（1名）で、次いで4.6 ha（1名）、3 ha（3名）となっている。これらの5名のうち4名までが元小作農であって、1970年の農地改革（Land-to-the-Tiller Program）の結果自作農になったということは注目されてもよい。このように部落長の出身階層はせいぜい中層である。サンプルの部落長はすべて結婚しており、平均6人（2～14人）の子供をもっている。この意味でも彼らは普通のベトナム農民である。

部落長の任期は3年ということになっており、再任が可能である。中には14年間在任している者があり（サンプル番号 N15, 49歳）、就任してから5年を越える者は22名中5名を数えるが、半数以上は就任してから3年以内である。長期にわたってその地位を保つというよりは、比較的短期にその職をしりぞくことが多いといえよう。このことは前任の部落長に関してもいえ、9年間および6年間つとめたという例外を除けば、大部分は4年未満で現在の部落長と交替している。

#### IV 宗教的リーダー

ベトナムには様々な宗教が交錯しているが、デルタも例外ではない。デルタは宗教的な多様性に最も富んでいるとさえいえる。

ベトナムにおいて第1に言及しなければならないのは、伝統的な村落のかなめであったディンの長および役員達である。既に述べたようにカトリック、上座部仏教、その他の宗教の勢力が比較的弱く、かつ伝統的文化の維持傾向が強いデルタ東北部ではディンを中心とする長老達の勢力が重要な場合が多い。ディンの祭祀役員会の構成にはさまざまなバラエティがあり、小は10人程度のものから大は250人に至る。ディンの長の役職をうけもつのは多くの場合最長老

にあたる老人であって、あまりにも老齢になると引退することがあっても、たいていの場合60歳を過ぎた者がこの役職を荷なっている。役員のうち重要な地位についているのはほとんど60歳以上である。これらはフランス植民地時代に郷職会議のメンバーであった者が多く、農地改革前の地主階層出身者が目立つ。役員会のメンバーは引退者あるいは死亡者の発生に応じて、残存メンバーによる推薦によって補充されたりする。組織の強固なところではこのようにして選ばれたメンバーが社から正式に任命される場合がある。時代が変わりつつあるとはいえ、ディンを中心とする長老達の指導力は軽視できない場合がある。たいていの場合、部落長はディンの祭祀委員会のメンバーではない。

とはいえ、ディンに関しては地域差や村落の歴史の新旧による変異を考慮することが必要である。治安上の理由によって25年ほど前に戸数が急激に増加したある部落(サンプル番号N1)では、自らの部落のディンを有するが、固定した祭祀役員会は存在せず、祭祀にあたっては部落長がその都度組織するという。デルタ南部のある社(サンプル番号S1)では、社の中に三つのディンがあるが、年寄りばかりで影響力がなく、社長(61歳)は祭祀役員会に入っていないと自ら言明する。カトリックが強い地域でもディンの重要性は著しく減退する。カトリック教徒が少数派を形成している場合には、彼らは役員には決してならないが、招待されれば祭祀に参加する。カトリックが大多数となるとディン自体が存在しなくなる。

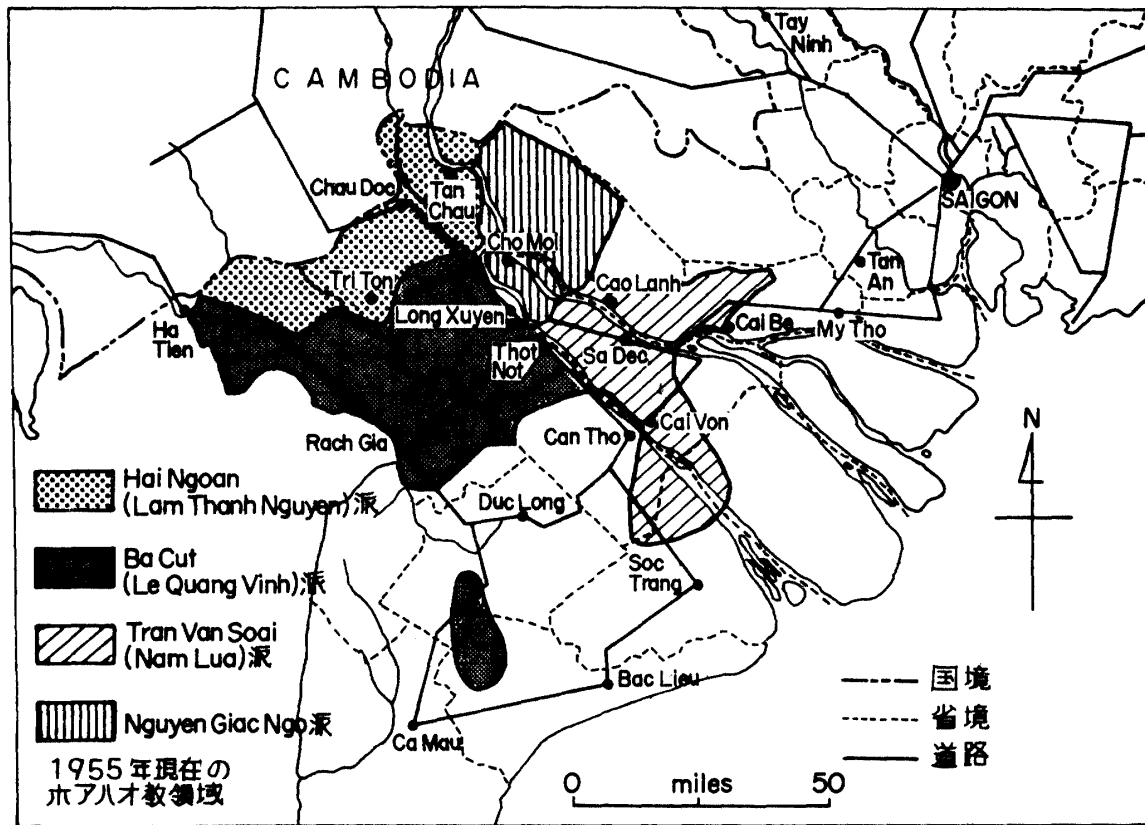
ホアハオ教は1939年に発生した仏教系の新興宗教で、An Giang, Châu Đốc, Sa Đéc を中心としてデルタで最も重要な特色のある宗教団体を形成している。カオダイ教徒とともに自らの武力をもち独自の動きをしてきたことで有名であるが、調査時点では彼らの一部の要請にもかかわらず一般市民として武器を保有することは禁じられていた。この宗教の教祖がベトミンに殺されたため、教徒は(彼らのいう)コミュニストに対して強い敵意を有してきたといわれるが、教祖を失ってから4派に分裂したため全体としては統一を欠いている。現在、3派が認められるが、強硬派として知られる一つの派では、部落、社、郡、省にそれぞれの団長と役員をもち、階級化された組織と自衛団を有していた。他の派においても組織性はきわめて著しい。

ホアハオ教徒は村落がディンをもつことを認めているから、古くから確立された地域ではディンの長老の影響力を保ったままで住民がホアハオ化されている場合があるので(サンプル番号N16)、この宗教の特性が必ずしも明瞭に現われないこともある。

カオダイ教は1926年に設立された東西の宗教を折衷した混成型の宗教であるが、デルタにおける信徒数は約30万人といわれ、<sup>7)</sup> デルタ地域ではホアハオには及ばない。この宗教の強い地域でも宗教指導者の影響力はかなり大きいと考えてもよい。

カトリックはその教会組織を通じて各地でまとまりのある団体を形成している。デルタのカ

7) 全信徒数は200~300万人といわれ、Tây Ninh, Gia Định, Mỹ Tho, Cà Mau, Bạc Liêu, Cần Thơ' 周辺に主として分布している。



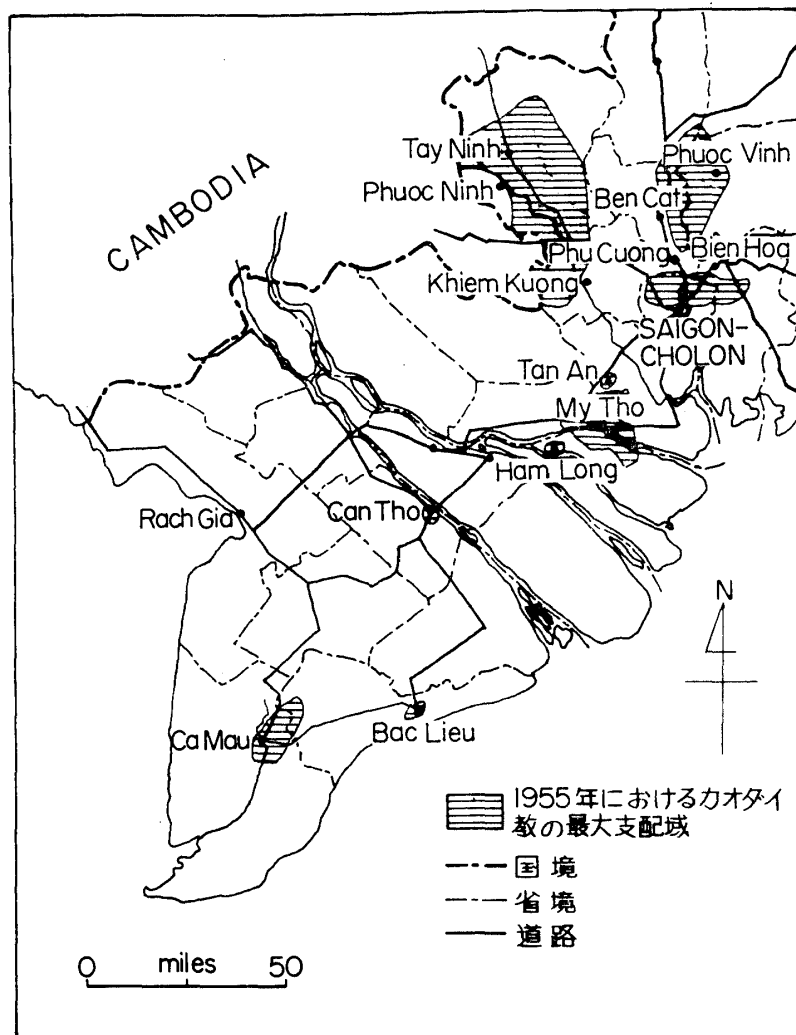
出所：図2と同じ

図4 ホアハオ教

トリックは30万人といわれるが、そのかなりの部分は北ベトナムからの避難民である。カトリックの神父は総じて比較的高い教育を身につけており、教会活動を通じて宗教的のみならず農業技術の解説に至るまで指導力を発揮することがある。農村開発にとっては最も有用な宗教的リーダーとして評価できるが、宗教的な禁止事項を含む家族計画の問題については逆に妨害的要素となる可能性もある。プロテスタントはデルタでは散在的に存在し、内部では強固な団結を示すが、全体的にみた場合その勢力は微少である。

ベトナム仏教寺院の住持も住民の尊敬を集めていることがある。住民は祖先崇拝を行ない、また儒教の祭壇をまつると同時にしばしば仏教徒でもある。デルタでは200年を越える古寺もあれば、比較的最近住持が招かれて建立された寺院もある。住持は70歳を越えることもあれば、ときには20代の若齢者、あるいは女性（尼寺）のこともある。これらの住持は同一寺または他寺においてある程度長期の修行を積んでいる。しかしながら、ベトナム仏教寺院は確固とした壇家組織をもつことは少なく、住民とのつながりも葬礼を含めた宗教的側面に限定される傾向がある。

上座部仏教の寺院はクメール人達のシンボルであり、寺院には住持を中心として少年の出家



出所：図2と同じ

図5 カオダイ教

僧が数多く収容されている。宗教維持の組織もクメール人の中では比較的発達しているように見える。この世界はマイノリティとして村落行政において劣位にたつクメール人の精神のよりどころである。しかしながら、上座部仏教の僧侶もベトナム仏教の場合と同様、俗世のことには関与しない傾向が強いので、俗世界のリーダーシップとは断絶があるように思われる。

## V 農村におけるその他のリーダーと協同組織

### (1) その他のリーダー

宗教的リーダー以外に農村部でリーダーとして重要な働きをしていたものとして、官吏、旧村役、元地主や富裕商人、小学校長などが挙げられる。仏植民地時代の郷職会議のメンバーがディンの祭祀役員会の重要なポストを占拠していることについては既に述べた。彼らはしばし

ば旧地主でもある。農地改革以後彼らの経済力は急激に下降したが、一部の者は商業への転向を計ったりしている。中国人の多いショッピングセンターでは、中国人商人が私立中学校の理事長として大きな役割を果たしたりすることもある。現職の社長や社の評議員も、部落長にとっては重要な人物であり、近くの町で公職についている者も重要視される。以前に村で重要な役割——例えば社長や評議員——についていた者も部落では無視し得ない存在である。

小学校教師は多くの場合女性であって、村落リーダーとしてはあまり機能を果たしていないが、中年男子の小学校長ともなると社長、部落長、あるいは一般の住民から各種の相談をもちかけられることが多い。これらの小学校長が旧地主階級の出身であると、教育者としての役割よりも有力者としての色彩が強くなる場合がある。

## (2) 協同組織

農村部には数は必ずしも多くないが各種の協同組合的な集団がみられる。例えば、かんがい用ポンプの組合、電燈事業の組合、飲料水ポンプの組合、魚養殖組合、肥料・農薬購入組合、トラクター共同所有の組合、架橋のための組合などである。これらのうち若干のものはかなり多数の組合員を集めて運営されている。例えばある電燈事業の組合は実業家がリーダーシップをとって200戸以上の加入者を有して運営されているし、あるかんがい用ポンプの組合は50～60人の加入者を有して、1カ月あたり600ピアストルを徴収することによって成立している。後者のリーダーは一つの組合においては2haを耕作する59歳の農民、もう一つの組合の場合は1½haを耕作する56歳の農民である。しかし一般にはより小規模の組合が多く、トラクター共有組合や魚養殖の組合などは4～20人で構成されることが多い。

組合は実利をとまう場合に形成され、若干の例外を除けば概して比較的小規模である。組合加入に意味がなくなるとこれらは比較的簡単に解散する。このような実利的・非固定的な性格は農民の間の田植えの共同労働組織においても現われることがある。一例を挙げると、5軒が共同で作業を行ない、経営面積の差は作業日の多さに応じて収穫物で相殺するのであるが、このメンバーは毎年変わるという。これらの自発的な共同組織の存在は、将来の大規模な共同組織加入への可能性をうかがわせるものではあるが、自ら発展して大組織になり得るものではない。

農業協同組合などの大組織が形成された例は僅かながら存在する。ここでは一つの解散の例を挙げよう。この組合は一つの社（サンプル番号E10）を単位として1959年に形成され、650人のメンバーと7人の専任スタッフを有していたが、1970年には解散してしまった。その原因は、第1に1969年の動員のため若くて活動的なスタッフが失われたこと、第2に農民にとって有利な肥料の直接援助が中止されたこと、第3に書類・手続きの複雑さである。若壮年層の多くが兵役にあって有能なスタッフを得ることが困難で、一般農民側においても中年・高齢者が

大部分を形成しているということは、協同組織をつくり、維持していくためには大きなマイナスとなっていた。

## VI 部落長の立場

ベトナムの農村は伝統的には高齢者によるリーダーシップによって支えられてきたといえる。比較的若い年齢層からの部落長の選出あるいは指名は、少なくとも部分的にリーダーシップの若齢化をひきおこしている。若齢化は明らかに進行中であり、前代の部落長の就任時の年齢にくらべても現部落長の平均年齢はいくらか若くなっている。<sup>8)</sup> このような若齢化は部落長のレベルにとどまらず社長のレベルにおいてもむしろより強力に進行していた。

部落長の若齢化にとまらぬ大きな問題点は、村落人口において若壮年層が少ないため同一世代の支援を十分に持たないということであった。この意味では、この現象を「孤立した若齢化」ともよぶことができよう。部落長自身が必ずしも卓越した教育経験をもちないという事実は、彼のリーダーシップをこの不利な状況の中でさらに不利にしている場合がある。このような事情の下で、部落長は上級の行政を担当する社長ときわめて密接に結ばれ、社長あるいはさらに上級の郡(District)の長の指示をきゅうきゅうとして実行しようとしているのである。

部落長と一般農民および他の農村リーダーとの関係は上述の事実をふまえながらいくつかのタイプに分けることができる。第1は解放戦線がかなりの勢力をもつ地域によく出現する、社長のみと結ばれ住民から孤立した部落長のタイプである。既に述べたようにこのような地域では部落内からは候補者が出にくく、やむを得ず無理やり住民の一人を任命したり、他部落から適任者を求めて任命するという事態がしばしばおこる。住民の一部が解放戦線側であるといわれ、前任の部落長が7人も続けて殺された部落の長に、他部落で行政担当の助手をつとめていた者を任命したケース(サンプル番号E6)がある。6カ月前に任命されたこの部落長(47歳)はオフィスに簡易ベッドを持ち込んで、兵隊に守られながら夜間も帰宅しない。また他のケース(サンプル番号N8)では他部落出身の兵隊(24歳)が部落長に任命されているが、彼は妻子を自分の部落に残してオフィスの近くに下宿し、オフィスでは拳銃をいつも腰につけている。住民をオフィスに召集してもなかなか集まらず、3、4回伝達をしてようやく30人ばかりがやって来たという。このような地域では部落長の正常な機能はほとんど達成されない。しかも徴兵の仕事や政府の命令の実行は、これらの部落長と住民の間にしばしばみぞをつくる。

第2のタイプは伝統的な高齢者のリーダーシップが強い地域に現われるもので、部落長自身は必ずしも部落内の有力者とはみなされず、部落の長老達と地方政府との間をつなぐ役割を果

8) カオダイ教の勢力が強い部落(サンプル番号E5)や、ベトナムにおける少数民族の一つでデルタにもそのごく一部が居住するチャム人の部落(サンプル番号N9)などでは、現在でも中年あるいは高齢層の中から部落長を選出し続けている傾向がうかがわれる。

たすものである。

第3のタイプは宗教的リーダーの強い場合で、部落は宗教組織の中に組み込まれているか、あるいは宗教的リーダーにたえず相談をもちかける。この傾向はホアハオ教やカトリックが強い地域で現われやすい。カトリックとホアハオ教とが混在している地域で、部落長（カトリック、26歳）が、神父（34歳）とホアハオの長（50歳過ぎ）の両方を部落の重要人物として挙げている例（サンプル番号N5）もある。

第4のタイプはクメール人居住地域に出現するものである。われわれの面接調査のデータにはクメール人自身が部落長となっているケースを欠くのでこの場合の事情は分からない。人口的には少数のベトナム人あるいは中国人とベトナム人との混血児などが部落長になる場合はかなり多く出現する。このような部落長はクメール語を解することができるが、その機能は政府の命令の伝達にとどまるようである。

#### お わ り に

南ベトナムが永年の戦火にさらされていたのは不幸なことであった。デルタの農民の一人一人は概して勤勉で、自らの力で生産を増大させようとする意欲が他の東南アジア諸国の農民に比してより顕著であるように思われる。このような状況は新しい組織の形成によっていっそう強化されることは自明のことであっても、農村には若壮年男子の不在のためその荷ない手が不足していた。高齢者や旧地主階級の権威はそれを維持する基礎が失われつつあるにもかかわらず、適当な代替者を見出せないままの状態が続いていた。また治安の悪い場合には住民は何かと消極的である。部落長はこのような状況の中であって、政府の命令を伝達する機能を果たすにとどまる場合が多く、治安の悪い状態ではときにはそれさえも十分に行なわれなかった。

平和の回復と新たな秩序の達成が、大量の若年兵士の帰村をともしつつ、如何なる形の農村リーダーシップを再編していくかはきわめて注目すべき問題である。